

Ⅲ. 特別報告

1. 戦後のドイツのスポーツ施設の推移

中央大学教授 市場 俊之

坂上康博（司会）：よろしくお願いします。今回報告していただく市場先生のご紹介を簡単にさせていただきます。市場先生は、東京学芸大学の学部を卒業後、そのまま修士課程に進学され、この時私と同級になりました。市場先生とはそれ以来の因縁ということになります。その後は、何を思ったか(笑)ドイツ語を勉強し、そしてドイツのテュービンゲン大学の大学院に留学し、とても長い間在籍され、博士論文を書き上げて帰国され、中央大学に就職されました。ということで、ドイツのスポーツについて多くの実体験をお持ちで、おそらく日本の研究者の中では、一番と言っていいほどドイツのスポーツ界の内実を知っている方だと思います。と、一応持ち上げておきたいと思えます(笑)。

ご専門は、元々は体操競技の技術についての運動学的な研究でしたが、ドイツではそれを歴史的に辿るという研究をされ、博士論文が『男子体操競技—その成立と技術の展開』というタイトルで中央大学出版部から刊行されております。ドイツ語文献の翻訳なども多く、手広く研究されております。ドイツのスポーツ施設という今回のテーマですが、市場先生は、政策等の研究を専門的にやってこられたわけではありません。今回の報告は、我々の勝手な都合によるものでして、無理やり引き受けていただいたというのが正直なところです。私としては、ドイツのスポーツの実態部分の話がメインでいいのではないかと思いましたが、それだけではなく政策の基本的な部分も新たに押さえていただきました。

一橋大学のスポーツ科学研究室には、ちょっと

前まではドイツの研究者がわんさかいて、なんでこんなに集っていたのかというような時代があったのですが、その世代の方があつという間にいなくなってしまうと、ドイツスポーツ研究がぼっかりとなくなってしまうというような感じであります。今回はそこを久々に補充していただくということも含めてお願いいたしました。ではよろしくお願いします。

市場俊之：紹介していただきました市場です。坂上先生から頂いたのは「戦後のドイツのスポーツ施設の推移」というテーマですが、これに合わせながら私の経験と、私が調べたことなどを織り交ぜてお話しさせていただきたいと思えます。先程の坂上先生からの紹介を補足する形ですが、宮城県出身です。妻の実家は新潟ですが、継ぐべき家業のため、12年前から新潟市民です。火曜日の朝に東京に出てきて金曜日の授業が終わったら新潟に帰るとい生活をしています。「プチ単身赴任」などと言ったりしています。1964年の東京オリンピックの時は小学1年生でした。ですから、1957年生まれです。中学校から本格的に体操競技を始めました。中学・高校時代は東北地区大会あるいはインターハイにも出場しました。大学時代はインターカレッジ2部で何枚か賞状を貰ったりしました。1986年2月から7年間、1993年3月までドイツのテュービンゲン大学にいて万年学生をやっていました。この間、STB（Schwäbischer Turnerbund＝シュバーベン体操連盟）という地域の体操連盟の名誉コーチをやっていました。名誉コーチとは偉いということではなく、ライセン

スがないにもかかわらずという意味です。小さな子供たちを相手にアルバイトをしていたおかげで、7年間も向こうで暮らせてしまいました。活字になったものについては先程坂上先生から紹介がありましたので、ここでちょっと自己主張しておきたいと思います。私が体操をやっているこの写真は、2013年9月に伊勢市で行われた社会人大会のものです。要するに、今でも現役選手だということを主張したいということです(笑)。

1. みんなのスポーツ

今日のテーマに移ります。ドイツのスポーツは、「チャンピオンスポーツ」と「みんなのスポーツ」に分かれます。今日は幅広いという意味での「Breitensport (ブライテンスポーツ)」あるいは「Sport für alle (みんなのスポーツ/スポーツ・フォー・オール)」を土台にしてお話したいと思います。そして、日本でもよく知られている「ゴールドプラン (Goldener Plan)」に焦点を当てたいと思います。しかしその前に、画面にあるように「スポーツの第2の道 (Zweiter Weg des Sports)」と「フェラインシュポルト (Vereinsport)」、「ホッホシュールシュポルト (Hochschulsport)」について話したいと思います。また、「ドイツ体操祭 (Deutsches Turnfest)」という全ドイツ運動会が日本ではちょっと誤解されている部分があるので、映像と共にお話できればと思います。

さてドイツといえば、まずはサッカーを連想します。これは少し古い資料ですが、向かって左側が2008年時点でのドイツ・サッカーリーグ1部ブンデスリーガのチーム所在地です。右側の男性はデットマル・クラマー (Dettmar Cramer) です。今のサッカー好きの学生たちにはほとんど知られていないのですが、「日本サッカーの父」と呼ばれている人物です。外国人として唯一、日本サッカーの殿堂入りをしています。1925年生まれだそうです。日本ではあまり注目されない馬術がドイツでは盛んです。日本でも愛好家が多いテニ

ス、ドイツだとシュテフィ・グラフ (Steffi Graf) が有名です。けれども、グラフも学生たちは知りません。私の妻はグラフに「ラケット代りに竹ぼうきを持たせたら魔女だよ」といっていました(笑)。今は、アメリカのアンドレ・アガシ (Andre Agassi) 選手の奥さんです。太田雄貴などの活躍で日本でもメジャーになりつつあるフェンシング、ドイツでは非常に盛んです。ここでプライベートな話です。このピンクのレオタードを着ている選手は、私がチュービンゲン時代の7年間に知り合った友達の娘です。これは2008年北京オリンピックに備え、日本に事前合宿に来た時に撮った写真です。彼女は身体が大きく、身長は170cm以上です。体操選手をやめた後、彼女は陸上の棒高跳びに転向しています。ドイツスポーツ連盟 (Deutscher Sportbund=DSB) に加盟しているスポーツ団体ベスト12を紹介します。2003~2005年のどこかですが、はっきりしないので200x年としてあります。その後ドイツスポーツ連盟は、ドイツオリンピックスポーツ連盟 (Der Deutsche Olympische Sportbund=DOSB) と改称しています。加盟団体のトップは、会員数約630万人のサッカーです。続いて体操、テニス、射撃の順です。日本では自衛隊あたりでないとなら射撃は出来そうにありませんが、ドイツでは4番目に射撃が入ってきます。陸上、ハンドボール、乗馬、卓球、スキーというところです。このあたりはDOSBのホームページ辺りから探っていくと一覧表が出てきます。一方、日本の体協あるいはJOCで調べてみても全体を網羅したものは残念ながら出てきません。それぞれの団体の個別資料しか出てきません。このランキングからもわかるように、サッカーはさておき、日本では想像しにくいのですが体操が盛んです。日本でいう狭い意味での体操、器械体操や体操競技、新体操ではなく、幅広い一般的な運動、あるいは運動一般というように捉えていただくとありがたいです。

2. スポーツの第2の道

では、「スポーツの第 2 の道」の話をします。これはスポーツ科学辞典 2003 年版からの抜粋ですが、「1959 年ドイツスポーツ連盟臨時総会で決議された行動計画(アクションプラン)、いわゆる第一の道といわれる競技スポーツから転換して、みんなのため、つまり一般市民、子供、高齢者および身体障害者のスポーツ拡充を目指すという行動計画が決議された」というわけです。第 2 次大戦後の復興が軌道に乗ったというか成し遂げられた、言いかえると、余暇時間の増加、あるいは国民の仕事からの解放やストレスからの解放、気分転換と同時に遊びやスポーツへの欲求が高まったという背景があるそうです。

後で話すゴールドエンブレムと二つの車輪になるわけですが、この行動計画の実施基盤が、私の考えではフェラインシュポルトです。いわゆるクラブスポーツです。ドイツに滞在しているときから実感していました。このフェラインシュポルトについて歴史的なところを振り返っておかなければならないと思いますので、ヤーンから歴史的なおさらいをします。

フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn) が 1811 年、いまから 200 年ちょっと前ですけれどもベルリンのハーゼンハイデ(Hasenheide)という公園にトゥルンプラッツ(Turnplatz=体操場)を作りました。器械運動の発祥だと言われています。やや専門的な話になりますが、現在の体操競技の平行棒(Barren)は、実はあん馬(当時:Schwingel)の取っ手部分なのです。ヤーンは青少年の腕力のなさを嘆いてこの取っ手部分だけを大きく作りました。それをハーゼンハイデに初めて設置したのです。「汝は今、平行棒の発祥の地に立っている」という記念碑が建立されています。あん馬と平行棒は独立した競技種目ですが、ことの発端はこうだったということです。

平均台の基となるような丸太が見えます。大阪学院大学の松本芳明先生によると、この上の器具についてヤーンは帆船のマストのようなものを強

く意識したのではないかということです。登ったり下りたりする器具です。これらのものが設置されたのがハーゼンハイデです。このハーゼンハイデで青少年たちの器械運動が始まりました。その背景はナポレオン支配下に対する愛国主義運動、身体運動を通じて愛国的な青少年教育のドイツオリジナルを作ったのです。ここで重要なのはそれ以前のグーツムーツ(Johann Christoph Friedrich GutsMuths)は学校の中で体育としていわゆるスポーツ活動を行ったのですが、ヤーンは学校外の自主的な社会活動として位置づけ、地域別にクラブを結成させたわけです。

その意味では、いわゆる総合型地域スポーツクラブの発端はこのヤーンのハーゼンハイデあるいはフェライン遡ることが出来るのだらうと思います。体操競技、運動学の専門の金子明友先生の本によれば、ヤーンは優秀な人たちに「体操芸術家同志会(Turnkünstler-Verein)」という学校とは別の組織を作らせて活動させたといいます。これがドイツでいうフェラインですが、総合型地域スポーツクラブの起源に価するということを確認しておきます。

現在、ドイツに 8,790 ほどのクラブがあり、約 2,700 万人の会員がいます。ドイツの人口は 8,000 万人強ぐらいなので、かなりの割合でスポーツクラブに加入しているということです。先程、ランキングを出したところで、DSB とか DOSB というように言いましたが、2006 年 5 月に従来の DSB(ドイツスポーツ連盟)が DOSB(ドイツオリンピックスポーツ連盟)に統合されたのです。

フェラインについてですが、日本でも 15 年位前から総合型地域スポーツクラブが話題になっています。学生にしても社会人にしても、学校や職場まで片道 2 時間、往復 4 時間を毎日電車の中で過ごすというような状況の日本では、私の意見としては地域密着型のスポーツクラブは発展しきれないと思います。ここ 15 年 20 年の歴史しかない日本と 200 年の歴史があるドイツでは、フェラインスポーツの浸透度・充実度は比較になりません。

ドイツは発展しています。そのフェラインの構造について聞かれるとつらいところもあります。私を知る限り、日本の総合型地域スポーツクラブは、これをやるしかないからこれをやっているという、抽象的で申し訳ないのですが、追い込まれているというか、追われたらこうなってしまったという形式が強いのではないかと思います。

ドイツの場合は、クラブに行くと、クラブの会議などがあると、子供たちがお父さんやお母さんを連れてきます。お母さんは焼いたケーキを持参しお茶飲み会が始まったりしている、反対側では子供たちがなにかやっていたりというような状況を直に経験できたからこそ、こうした印象を抱くのかなと思います。一般的に日本人もドイツ人勤勉ではあるのですが、その質は全く違います。誤解を恐れずに言うと、遊ぶために仕事をするといっいいドイツ人をいい意味で見習うべきで、切り替えをはっきりさせましょう。日本人に必要なのは、日本人は生活の為にあるいは生きてくために不可欠なものとしての身体活動ないしはスポーツを自身の生活の中に位置づけることでしょう。さらに身体活動やスポーツの認識を個人レベルでより広め深めることが急がなければならないでしょう。その具体的な方策として最初に指摘しましたが、せいぜい片道1時間圏内で住居と勤務先/学校を行き来でき、帰ってきたら素早く着替え、仕事カバンを置いて、スポーツ用品入りのリュックを背負い、ヘルメットをかぶってマウンテンバイクのペダルを踏む、10分ほどのところにスポーツ環境がある—こういう意味での職住接近が不可欠でしょう。

日本は今なお残業することが半ば当たり前の社会ですが、遊ぶために仕事をするドイツ人を見習って、勤務後の18時ぐらいからはスポーツができ、汗をかいた後にはクラブハウスで一杯飲みながら軽くおしゃべりをして、「また来週」と別れる。このような社会にならないといけない、だからスポーツだけが独り歩きしていてもたぶんダメだろうなと思います。ここまで来るときに坂上先生と

話したのですが、2020年の東京オリンピックで選手たちが奨励・強化されるのは当たり前ですけれども、それだけではなく、一般の人々のために広い意味でのスポーツをどれだけ充実させることができるか、このことが私たちの大きな課題だろうと考えています。

3. ホッホシュールシュポルト

続いてホッホシュールシュポルトに話を移します。SS2000と書いてありますが、2000年の夏学期のプログラムです。A5版の冊子で、この中には何曜日の何時からどこに行けば何が出来るという案内が出ています。ホッホシュールシュポルトは、日本の大学における授業としてのスポーツ活動、あるいは課外でのクラブ活動とは異なったものです。ドイツの大学におけるホッホシュールシュポルトとは、大学が学生及び教職員に提供する社会福祉厚生事業の一環としてのものです。例えば、一橋大学OBの石原慎太郎が講演会を開くとか、大学の音楽コンサートと同列にあるような位置づけになっています。言い換えると、学生にとっても教職員にとっても勤務の場として捉えられる職場スポーツの特殊形態かもしれません。

これは近くの丘から「スポーツ科学研究所 (Institut für Sportwissenschaft=IfS)」を俯瞰したものの(パワポ)で、四角い建物が4つ、向かって右の方にはグラウンドがあり、その向こうには新しい建物があります。ホッホシュールシュポルトは、この施設を中心に行われています。テュービンゲン大学のホッホシュールシュポルトの目的はこれだけ(パワポ)あります。学生のスポーツに対する関心を引き起こしてそれを満たすこと、異なった能力に対応すること、つまり上手い者だけではなくて初心者あるいはそれほどでもない人たちにも幅広く対応しようということです。

この3つ目あたりが日本では中々出てこないもので、社会的交流の場の提供、学生間、教職員間、そして大学間の交流促進を目的としています。研

究や勤務時間によって生じる運動不足や偏った作業による身体負荷を解消する場を提供します。原則として無料、あるいは安い値段でスポーツ参加を可能にします。学期中に行われるものは無料ですが、スキーやスノーボードといった冬のスポーツ、夏だとウィーンまでのドナウ川下りといったものが行われますが、こちらは費用がかかります。具体的な活動内容ですが、1学期に大体150のプログラムが提供されています。体操・ダンス・フィットネス・個人スポーツ・チームスポーツ・野外スポーツなどがあり、どのプログラムにも最低2つ(初級・上級)のコースが準備されています。月曜日から金曜日、15時45分から22時30分まで、大学の中あるいは大学近くの学校等の施設で行われています。

ひとつのプログラムは40分から120分までいろいろです。スポーツ科学研究所の教職員も指導に関わりますが、だいたいは学生が学生を教えるのです。指導者としての学生は、ただそのスポーツが出来るというわけではなく、例えば、バドミントンであればドイツバドミントン連盟が主催する指導者養成コースを経てライセンスを獲得した者なのです。この指導者養成は先程話したフェラインシュポルトと関係してきます。プログラムへの参加は任意です。空いている時間を探し、月曜はプールで泳げる、火曜日はグラウンドでジョギングができる、金曜日にはエアロビクスに参加できるといったように自分で選んで自分で行くのです。

そして、プログラムへの参加は、全く単位とは関係がなく、つまり大学卒業要件にホッホシュールシュポルトは組み込まれていないのです。日本の場合だと、1学期の中で15回の授業のうち「4分の3出席」とか「単位が危ないよ」みたいなことが頻繁に起きますが、ドイツでは事情が異なります。ドイツ人は小さいころからフェラインと関わっていて、学校とは別個に家に帰ってきてから地域のクラブに行っておスポーツしています。200年の伝統なのか、個人のセルフディシプリンなの

か、フェラインシュポルトの成果なのか、自分で参加すると決めたらきちんと来るのです。それがすごい。欠席の場合は理由をはっきり言って休み、翌週からはちゃんと来るのです。そこはさすがドイツ人と言うべきでしょうか。これがフェラインシュポルトの精神面の教育的成果かなと思います。話を戻しますが、参加状況については、全体の3割ぐらいが参加・利用しています。女子学生の方が男子学生に比べて参加が多い印象です。

4. ゴールデンプラン

ここから今日の中心のゴールデンプランについてです。今写っている本(パワポ)はゴールデンプランの本物の冊子です。実物を回覧します。そしてこちらは「ゴールデンプランオスト」です。ドイツ再統一後のドイツ東部版です。ゴールデンプラン、「黄金計画」、すごいタイトルですよ。これは先程の第2の道と一緒に1959年、1960年あたりからです。みんなのスポーツというスポーツの啓蒙計画に先立つもので、ドイツ人らしく第2の道を推進するためには施設が、インフラが必要だということです。ドイツ人というのは、もし野球がやりたいと思ったときに、人数も足りなければ場所も狭いから三角ベースでやろうというような柔軟性を持っていません。野球だったら9人集め、四角形のダイヤモンドを作るでしょう。まずは器づくりから始めます。また、走りたのに走れる場所がないような場合、もし日本人だったらトラック1周で320mとしかとれなくても、320mのトラックを作るでしょう。しかしドイツ人は違います。400mが国際規格なら、よし悪しにかかわらず400mトラックは絶対に作るというような考え方をするわけです。保養やスポーツに関わる施設が、国民及びその後継者(若者)達に必要な不可欠なのだという考え方です。

ゴールデンプランは、第2次大戦後の1959/60年から「第2の道」と共に始まっています。しかしながら、その基本構想そのものは、1920年、ヒトラーが台頭する前のワイマール共和国の初期に

まで遡るのです。1971年に出た『ダスグローセスシュポルトレキシコン (Das große Sportlexikon)』という辞典に書いてありました。1920年の時点で国民一人当りに3平方メートル、日本で言うとい坪感覚でしょうか、が必要とされ、その施設建設のためには当時で16億ライスマルク(換算レート未調査)が計上されていました。

その計上した人物がカール・ディーム (Carl Diem) でありました。1920年ごろというカール・ディームはベルリンに「ドイッチェホーレシューレフュアライベスユーブングエン (Deutsche Hochschule für Leibesübungen)」というドイツ体育大学、今ケルンにあるものの前身ですが、そこを作っていた時期です。カール・ディームは1936年のベルリンオリンピックの関係で戦後にいろいろ言われていますが、やっぱりドイツのスポーツを語るには避けて通れない人物です。ちなみにカール・ディームにオンモ・グルーペ (Ommo Grupe) は教わっています。私はグルーペを直接知っていますが、グルーペはディームのことを絶対に悪く言いません(笑)。ベルリンの話をするとう睨まれたりしましたから。この1920年時点でディームが関与していたということは今後精査する必要があります。第2次大戦後のゴールデンプランは、戦後の復興と連動しスポーツ活動奨励の前例となる施設の不備・不足を解消するために、15年計画でやろうとしたものです。ドイツ人らしいというかヨーロッパ人らしいというか。

ここから少し余談になりますが、ヨーロッパに行くときよくある石造りの教会、サグラダ・ファミリアのようなものですが完成してないですよ(笑)ヨーロッパの教会を設計する設計者というのは設計する時点で悟っているんですかね。自分が生きている間にはこの建物は完成しないというのは明らかなのにちゃんと設計図は書き上げる。年数が経ち過ぎているので、土台と上の様式が違うものになってしまっている。石造りの建物は土台がしっかりとしなきゃいけないので土台作りに時間がかかるし重要であるということがあるのでし

ょうか。このあたりに関しては木造建築で、すぐに建て替えができる日本とは、建物と精神構造がどれだけつながるかはわかりませんが僕は少しそんなことを感じています。良い意味で日本人は明日のことを今日の夜に徹夜してでもまとめることがすごく上手だと思います。5年後10年後のことについて考える力は少し弱いのではないかと、僕自身を踏まえてみても思います。

画一的な施設を作るのではなくて、自治体の地域的な特性に合わせた施設を作ります。湖沼があればそれを利用したもの、あるいは冬に凍るような所であれば、スケートリンクをとといった具合です。1960年時点で63億マルクが予定されていましたが、15年間で大体3倍の147億マルク(1兆2,300億円)がスポーツ施設/インフラ整備(体育館・グラウンド・テニスコートなど)に使われました。資料に拠れば、費用の分担は連邦政府、つまり国が2割、州が5割、自治体が3割になっていたようです。1975年に終わったわけではなく、ゴールドンプランは1976年から1992年まで継続され、200億マルクぐらいが支出されています。

次にもう一つ、これはゴールドンプランオストとも関わってくるものです。まだ調査していませんが、ドイツでは2000年以降に新たに「ゴールドンプログラム」というものが実施されているようです。残念ながら詳しいことはわかりません。友人であり私の学位論文の副審査員でもあったミュンスター大学のミヒャエル・クリューガー教授 (Michael Krüger) は、以前「ドイツはスポーツ施設王国と世界中から苦笑いされている」と言っていました。箱モノばかりが多くて中身が伴わないということなのですが、日本と比べれば内容もしっかりしていると私は思います。施設充実、ドイツをドライブするとわかります。ある街から出るとテニスコートや野外プールはあちらという標識が、しばらく田園風景を眺めて次の街に近づくともたフットボール場などと書かれた標識が必ず見えます。街の中に入れば、一橋大学にあるような古風漂う建物の中が室内プールになって

いることもあります。実際、観光バスに乗るのではなくて自分で動き回ると割と容易にゴールデンプランの成果なのではと思える所を見つけることが出来ると思います。

オストの話をししましょう。オスト (ost) は英語で east です。ゴールデンプランの東版です。旧東ドイツ時代は競技スポーツのみが強力に奨励され、みんなのスポーツは軽視されてきたと言われています。このことを反省し、ドイツ統一後の1992年に開始された15年計画です。やはり、施設・設備に関わるものです。具体的には、小さい箇条書き(パワポ)の方です。旧東ドイツ地域のものについて、これからも使用可能かどうか、欠陥はあるが使用できるか、重大な欠陥があって使用に耐えない、安全運営上使用不可、これら4つの段階に分ける調査が行われました。その結果、これからも使用可能と判断されたのは10%ぐらいだったようです。1960年からのゴールデンプランの規格に合わせ、旧東ドイツの各州における設置されるべきスポーツ施設数が計算されました。これは繰り返しますが、画一的な計画ではなくて各州の地理的条件等を踏まえています。15年間の計画で250億マルクの予算が計上されました。

5. ドイツの競技スポーツ

さて今日は、みんなのスポーツをメインにしてきましたが、ここで競技スポーツにも少し目を向けてみたいと思います。これはなぜかという、私が日本のナショナルトレーニングセンター(NTC)スポーツ科学センター(JISS)を批判したいからです(笑)。ドイツには日本の国立競技場のようなナショナルスタジアムはありません。ナショナルスタジアムはないけれども、国立競技場規模の大きなスタジアムはドイツの各地域にあります。これもたぶんゴールデンプランの成果です。

オリンピック支援拠点(Olympiastützpunkte)というトレーニングセンターが、1984年のロサンゼルスオリンピックの頃から設置されています。1992年時点でドイツ中に21箇所あります(パワ

ポ)。NTCほど巨大ではありませんが、各地域、各都市に複数のスポーツ競技の強化拠点になっています。地図にあるように21箇所分散しています。これがドイツのチャンピオンスポーツを支えていると考えていいと思います。例えば、ベルリン郊外にキーンバウム(Kienbaum)という所に支援拠点があります。ここは旧東ドイツ時代のドーピング研究の拠点のひとつだったのですが、現在は陸上や体操競技の強化が行われています。

疲労回復のためにマイナス50度くらいまで冷やすことのできる個室も見学してきました。マスクつけて入らないと喉を痛めるそうです。シュツットガルト(Stuttgart)にも支援拠点としてクルンストゥルンフォーラム(Kunstturn-Forum)という体操競技専用体育館があり、私も練習したことがあります。サッカー日本代表の岡崎慎司選手が所属していたシュツットガルトのサッカーチームのホームは、ネッカーシュタディオン(Neckarstadion)ですが、この体育館の隣です。

一方、日本ではNTCとJISSが2000年以降になってやっと出来ました。自己紹介したように私は現役選手なので、NTCで練習したことがあるのですが、とても大変でした。日本のNTCはトップ選手とスタッフしかいない。それもプラスチックのカードキーを持ってないとトイレから練習フロアに戻ってこれないのです。どうしてこんなにセキュリティが厳しいのかと思います。我々の税金の一部が投入されているのに我々が使えない。何ということだと50過ぎの老ジムナストは少し憤慨しているわけです。

ドイツの支援拠点はトップ選手も練習していますが、地域にも解放されています。おじさんおばさんもいるわけです。金メダリストの横でそういう人たちが練習している光景が見られるのです。ドイツはトップ選手の強化とみんなのスポーツはピラミッド型ではなくて二本の柱になつていわれています。しかしながら、日本に比べればまだまだ近い関係にあるようです。皆さん、タイガーマスクご存知でしょう。日本のNTCやJISSは「虎

の穴」ですね (笑)。まったく一般に開かれていない。

一言付け加えると、旧東ドイツのステートアマについて、西側諸国は相当な批判をしていたのですが、日本の NTC、JISS を見ていると東側のやっていたことのいいとこ取りなので、批判できないと思います。同時に、国が支援することによって競技スポーツが国家の出来事になってしまい、口先ではスポーツと国際政治は無関係と言いつつ、実際は金メダルがいくつとか、日本は何個で…というランキングが出てきます。スポーツが国力というか国の勢いのバロメーターになっています。いい言葉ではありませんが、スポーツが代理戦争と化してしまっている。スポーツが国力を示すというまさに旧東ドイツが行っていたことを全世界が行おうとしているのではないかと思ってしまう。一部のトップ選手にとって NTC や JISS は非常にいい環境でしょう。だが、まったくみんなのスポーツにはなっていないのです。

6. ドイツ体操祭

ゴールデンプランについて駆け足になってしまいました。短かったかもしれませんが、次は、ドイツ体操祭についてお話させていただきます。先ほどお見せしたランキングの会員数が 2 番目に多いドイツ体操連盟が主催するのがドイツ体操祭です。なんと 1860 年に始まり、1938 年までに 18 回行われました。開催間隔は不規則でした。第 2 次大戦後は 1948 年から 2008 年まで 23 回実施されました。旧東ドイツでも同じようなものが行われていました。再統一後はほぼ 4 年周期で開催されています。

2013 年は、ハイデルベルグの近くのマンハイムを中心として、初めて一都市ではなく地域で開催されました。ちなみに去年の体操祭で私は、年齢別 55 歳から 59 歳のクラスに正式に参加でき、一等賞になりました (笑)。このドイツ体操祭の期間は 1 週間です。参加者、観客合わせて、だいたい 8 万人から 10 万人が集まります。ちなみにドイツ

体操祭の間に学校の生徒たちはどうするかというとドイツ体操祭参加のための欠席届がドイツ体操連盟 (Deutscher Turner-Bund) から web 上で出ます。これを使ってくださいということです。

日本の国民体育大会とはまるで姿が違うもので、「全ドイツ大運動会」といっていいものです。特徴としていくつか挙げてありますが(パワポ)、競技性と娯楽性が共存しています。ドイツ体操祭の期間中、競技的な全ドイツ選手権がいくつか開催されるのですが、これから観てもらいたいような日本だったら有り得ないこともあります。80 歳過ぎの女性がレオタード姿で出てきてゆか運動をしたり、日本だったら絶対 100m も走れないだろうと思われる女性が疾走したりする。だから運動会というイメージです。試合は年齢別でやってくれます。競技性と娯楽性に加えサブプログラムがあります。日本で言うバッジ・テストのようなものも行われたりして、観客も気軽に参加できるものがあります。若い人たちは学校の教室に寝袋で泊まります。朝食はコーヒーやココアにパンが 2 つ出てきます。さらに、体操祭の期間中は首から ID カードを下げておくと交通機関が無料で利用できます。日本だとマラソン大会に参加したりすると 4,000~6,000 円ぐらい徴収されますが、ドイツ体操祭は一つの競技に 10 ユーロぐらい、大体 1,600 円ぐらいで参加ができます。

ちょっと話題それますが、この頃の日本ではランニングやマラソンのイベントはほとんど RUNNET に仕切られています。web 上で全部申し込みが出来るような状況です。ただそのために、私が 12 年前から住む新潟では大きな変化が起きました。もともと 2,000 円ぐらいで参加できた新潟ロードレースが RUNNET に載ったとたんに 4,000 円になってしまいました。新潟マラソンも新潟シティマラソンと名称を変えて RUNNET になり、ゲストとして高橋尚子らのゲストを呼ぶようになりました。そうなるとうやうや 4,000 円ぐらいの参加費がかかるようになりました。体操の試合でも、往復の交通費はさておき、食事や現地の

交通費を入れると日本国内で伊勢市に行ったり北九州市に行ったりする方が、ドイツに行くよりも明らかに割高感があります。これにはスポーツクラブの公益財団法人としてシステムの違いもあるのでしょうか、残念ながら私はその辺まで詳しくありません。

次に映像を見ます。(映像開始)これは入場行進というパレードです。全部がこのような鼓笛隊を連れてくるわけではありませんが、クラブごとに街中をパレードします。完全に自己主張の場ですね(笑)。これはあるスポーツクラブのトランポリン部門です。トランポリンのネットを外してきて、ぬいぐるみを飛ばしています。これはなにやら棒を持っています。スイスではこういう旗振りの競技もあります。パレードは延々2時間ぐらい続きます。

岡本純也：これはフェラインごとにですか？

市場：そうです。フェラインごとです。

このおじさんたちと一緒に試合をしました。やはり若い連中はすごかったです。ここで注目してほしいのは、この背景の体育館です。これは学校の体育館ではありません。街の外れにあって、フェラインの催しで使ったり学校で使ったりします。器具はメーカーからのレンタルです。体操祭終了後、オークションに出されます。それでは、誤解を恐れずに言うならば「アダルトビデオ」を観みましょう(笑)。単純に30代以上の大人という意味です。これは70半ばのおばあちゃんです。その後ろで踏み切り板を片付けているのはたぶん彼女の孫なのではないかと思います。よく目つきが似ていました。これは60後半のおばあちゃんです。日本でも60過ぎのおばあちゃん参加者はいますが、残念ながらわずか1人ぐらいです。ドイツでは10数人います。おばあちゃんたちは毎回やっているわけではないと思いますが、逆立ちしたりする日常がある、またそれを可能にするインフラがしっかりと存在するという事です。このおば

あちゃんが最年長です。80歳を超えていますが、これからABBAの曲でゆか運動をやります。我々の母親が演技することはまったく想像できません。

坂上：フロアはどうなっていますか？

市場：フロアは国際規格で柔らかく作られています。

動画は以上になります。ゴールドンプランの話がどこかにいってしまったかのようにですが、一応施設・設備について、フェラインとホッホシュールシュポルトの話をさせて頂きました。以上です。

質疑応答

坂上：ありがとうございました。それでは事実確認や少し突っ込んだ質問など含めて自由に出していただければと思います。

尾崎正峰：ドイツにおいて体操を教えるときの制度的な身分としてライセンスがしっかりしていると思われませんが、ライセンスを取得するために参加している人について実体験を交えてお聞きしたいこと。もう一点は、クラブや施設を運営していく上で専門的に動いている人、専門職と言っているかもしれませんが、そのような人はどのように配置されているのかについてお話しいただければと思います。

市場：まず、ライセンスについては僕も聞かれるまで考えたことがなかったのです。僕がチュービンゲンにいたころのスポーツの学生たちは、大学の授業の中でのスポーツが終わると、協会主催のコーチ養成講座に行ったりしています。どうも後々学校の教員、スポーツ関連ひいては自分の出身のフェラインで教えるということを念頭に置いているようで、そのためにはライセンスが必要だから取りに行っていたのかもしれない。そう考

えています。極めて自然に行っていました。僕は名誉コーチでした。格が高いという意味での名誉ではなくて、サッカーのフランツ・ベッケンバウアーのようなサッカーコーチの資格はないけれどもドイツ代表を率いる様なことです。「オーネリィセンツ (ohne Lizenz)」と言っていました。留学生に対しては一か月でアルバイトが出来る時間というのが決められていました。僕は幸いなことにその限度でもらっておいて、交通費に下駄をはかせて、いわばガソリン代で生きていました。しばらく前のことなので時効ですけど、本当は違法ですよ(笑)。次ですけども、大きなクラブになれば運営していくのは専門職とか本職のアレンジャー/ディレクターがいます。小さいクラブの場合、テュービンゲンなどではだいたい公務員関係が多かったようですが、仕事が終わった後に自分の所属するクラブでボランティアをやっているという状況です。大きな組織になれば専門職の人が増えていくでしょうし、小さなクラブではボランティアという形式が多いのだらうと思います。大学スポーツの場合ですが、テュービンゲンの場合には専攻としてスポーツ科学があります。スポーツ科学の長が大学スポーツの長も兼ねていました。そこで実際の運営を仕切っていたのは日本でいう研究所の助手あるいは非常勤が多かったです。大学の「スポーツ科学研究所 (Institut für Sportwissenschaft)」の教員たち、特にプロフェッサーがホッホシュールシュポルトの運営にかかわることはあまりなかったです。ドイツでは、教授であるプロフェッサーと講師であるドツェントがはっきりと区別されています。学位と教授資格を有するプロフェッサーは、講義とゼミを、体育館やグラウンドの現場で教えるのは、(中には学位と教授資格を持つ者もいるが、たいがいは日本の学士か修士の学歴の) ドツェントというように住み分けをしています。長としてはプロフェッサーの名前も出てきますが、ホッホシュールシュポルトはドツェントの人たちが全体の運営をやっていたということです。

坂上：大きなクラブの本職のディレクターというのは、クラブが雇っているのですか？

市場：そうだと思います。シュベールビッシャー・ツルナーブント (STB) のマネージャーを長年務めこの前定年退職したロベルト・バウワー (Robert Bauer) という人がいます。彼は、小さなクラブの連盟体である STB の専門職のマネージャーでした。どれぐらいサラリーを貰っていたかはわかりませんが、彼はそれが本職でした。

中澤篤史：ありがとうございました。フェラインという言葉は体操クラブという意味ですか？

市場：クラブですね。

中澤：英語のクラブという意味のドイツ語はないのでしょうか？

市場：あまり使いませんが、この頃は英語化が進んでいまして「クルップ (Klub)」という言い方もしますね。ただ先程映像で観ていたように、パレードの行進で旗振ったりしているときの古くから使っている様な旗にはフェラインという言葉を使いますね。

中澤：意味内容としては、自治的に好きなように集まって好きなスポーツをするという組織ということでしょうか。種目も体操だけではなくていろいろやっているという。

市場：そうですね。サッカークラブとして有名なバイエルン・ミュンヘンというクラブがありますが、つい最近まで器械運動部門も持っていました。なにか事情があって体操は取り潰しになってしまったようですが。サッカークラブで言えばシャルケ 04 (Schalke 04) というチームがあります。04はおそらく 1904 年設立を指しています。ドイツのフェライン名の後ろには数字が付いています。

それは創設年のことです。クラブという単語はあまり使いませんね。

中澤：なんで学校外なんだろうという疑問を持ちました。ヤーンのトゥルネンから始まるとそういう出発点があるということですが、ドイツの体育思想史とかを見てみるとグーツムーツが学校の教科体育のカリキュラムを初めて作ったんだというようなことが書いてあり、一方では学校の教科体育を大事にする伝統があったと思います。ではなんで学校外なんだろうと。

市場：僕はグーツムーツのいた「シュネップフェンタール (Schnepfenthal)」の「ザルツマンシュレー (Salzmannschule)」にも行ったことがあります。確かにグーツムーツは学校の授業の中でやっていた。ヤーンは学校の外で始めて、なぜこっちが主流となってしまったのか。なぜこっちに価値を置いたのかと問われると、僕もわからないというのが正直なところ。だれかご存知の方いましたら教えてほしいです(笑)。

中澤：もう少し自身の問題関心についてお話しさせていただくと、日本の運動部活動の研究をしまして、日本のユーススポーツはやはり学校の中で行われているなど、その時によく比較に出されるのがドイツの例で、ドイツは地域のクラブが主だと。学校制度も半日学校の時代が長かったですし、学校教育が青少年の生活に及ぼす割合というのは少なかったのが青少年のスポーツも地域がすごく盛んだったという認識を持っています。その認識自体は正しいのでしょうか？

市場：そうですね。学校のスポーツは日本もそうなりつつあるかもしれませんが、すごく弱いです。学校にも体育館はありますが、週に1回か2回ぐらいの使用が最低限で、夕方になってしまうとフェラインの活動に使われてしまうというのが多いです。日本で学校の放課後に行われるクラブの様

なものもないわけではありませんが、やっぱり中心は、地域のフェラインの活動になります。

中澤：なぜそうなったのかということに関しては・・・

市場：なぜでしょうかね。

中澤：チャレンジングなテーマとしていかがでしょうか(笑)。

市場：その辺りのことは、本当に社会思想といえますか。対ナポレオン下でドイツ人として頑張らねばとヤーンが意識して、それが学校の枠を取り払う一つの要因であったのかもしれない。

中澤：でもグーツムーツも同じような思想で彼は学校に重きを置いたわけですよ。

坂上：内容に違いはないのでしょうか。学校の中でやっていることと、学校外でやっていることの間で。

中澤：学校の中だとスポーツではないでしょうしね。もっと強靱な身体を作るというところに意識が向いていそうですし。

尾崎：フェラインのことで補足させていただきますと、クラシック音楽の領域で世界的に有名なウィーンの「楽友協会」の原語は「ムジーク・フェライン」。「ムジーク」は「音楽」の意味ですから、つまりフェラインは領域としてスポーツに限られないわけです。中澤さんが指摘されたように同じ思いを持つ人たちが集まった組織というのがフェラインであって、その上に何が付くかは、それぞれに変わるといえることです。

市場：フェラインの中には別にスポーツの種目だけがあるわけではなくて、テュービンゲンのある

フェラインの中にはチェスの部門もありました。

尾崎:今日のスライドの中にも **Künstler** (芸術家) のフェラインというのがありましたから、いわゆる美術の領域も入ってくるということですね。

市場:この「体操芸術同志会」というのは金子先生の誤訳だろうと思っています(笑)。

尾崎:私もそう思います(笑)

市場:これは体操の技術の得意な人たちのグループ、そう言った方がよいと思っています。「トゥルンクンスト (Turnkunst)」というのは技のことを指します。例えば倒立や宙返りというものです。それを行う人々の集まりということなので、文字通り芸術家と訳してしまうとちょっと違うと思います。トゥルンクンストとあるので、これは身体が器用で技の上手い人たちの集まりという感じでしょうか。

坂上:細かいことですが、体操祭で振られていたたくさんの旗、あれは何ですか？ ドイツには地域や村ごとに旗があると思うのですがそれと同様のものですか？

市場:これは、そうではなくて独自のものです。アルファベットの **F** を逆さまと鏡像で4つ集めてあります。4**F** (フィーアエフ) といいます、「フリッシュ (Frisch)」「フロム (Fromm)」「フレイリッヒ (Fröhlich)」「フライ (Frei)」の頭文字が **F** なのです。「みずみずしい」「誠実」「朗らか」「自由」が全て **F** から始まるのでそれがドイツ体操のシンボルマークとしてアレンジされて入っていることが多いです。例えば八王子の旗とか、国立市の旗といってロゴマークがあったとしても、その背景にはこの **F** のマークが入っていたり、あるいはこの **F** のマークを中心にして自治体の他のシンボルマークがアレンジして入っていることが多い

です。

坂上:僕が98年の体操祭を見せてもらったときに印象的だったのは、入場式だったでしょうか、出場したクラブがみんな自分の旗を持って集合しているシーンです。クラブを単位とした祭典。これは日本では見ることのできない光景ですね。また、各種目の表彰では、最下位の人にも、例えば参加者が35人だとしたら「あなたは35番目の勝者です」と表彰する。これも印象的でした。

市場:ファーストウィナー、セカンドウィナー、サードウィナーといった形で全部にウィナーが付きます。

岡本:旗がクラブのアイデンティティということだと思うのですが、技には地域色といいますかクラブの特色といったようなものが入っていたりするのですか？

市場:それはどうでしょうかね。

岡本:体操に関しては普遍的なものであるということでしょうか。

市場:普遍的ですね。ただ、ドイツ国内というわけではなくて、例えば日本に伝わってきたドイツ起源と言われる体操を基盤に発達してきた体操とオリジナルのドイツの体操と、相いれないことはいっぱいあります。日本はドイツを見習いつつ、国際規格の体操をやっていますが、ドイツは国際規格も意識しつつ体操自体は元々自分たちのものであるという意識があります。いま国際規格ですと平行棒の場合、手のひらか脇の下でしか触ってはいけません。日本だと減点ですが、ドイツでは(実演)2本の棒の上で足を開いてポーズをとること、つまり太ももの内側が棒に触れていても「フォルクストゥームリッヒューブング (volkstümliche Übungen)」とし、我々/国民独

特の動きとしてきちんと技の価値を認めています。あるいは1本の棒に腰を下ろしてポーズをとってもOKです。つまりドイツの地域性というかドイツの国民性と言うものはあると思います。オリンピックの様な国際規格の体操も認めるけれど、自分たちのオリジナルなものも当然尊重し価値を置くということですね。

岡本：もう一点いいでしょうか。マスメディアと言いますか、なにか全体で一つのことをする、身体を集団でシンクロさせて行うといったことが、今あるのか、過去にあったのかをお聞きしたいです。

市場：シュピース (Adolf Spieß) やマウル (Alfred Maul) に始まる集団器械運動があります。日本の学校体育で取り扱われたりします。例えば、屋外の芝生のグラウンドに鉄棒を6台並べて音楽に合わせて体操選手が入れ代わり立ち代わり演技するというものがあります。シュピースやマウルはドイツ人ですが、集団器械運動はスイスで広まったのです。現在スイスでは集団器械体操大会がものすごく盛んで、毎年スイス選手権が開かれています。僕も何回か観に行ったことがあります。芝生の上に線だけ引いて大きなフィールドの体操や小さなフィールドの体操を行います。小さなフィールドで大体20m四方ぐらいの幅で15人ぐらいのメンバーで行い、大きなフィールドですと50人から60人ぐらいがグラウンドの内側を一杯に使って、音楽と共にきらびやかなレオタードを着た男女が集団で演技をします。もともとスイスで広められたものでしたが、近年はドイツでも人気になり、逆輸入され今ではドイツ体操連盟も力を入れています。日本では馴染みがありませんが、スイングリングというものも10台ぐらいグラウンドに並べて、音楽に合わせて振り子のようになって、イメージしにくいとは思いますが、振り子振動の折り返しで肩転移したり、あるいは一瞬無重力的になるところがあって、大きく振れていたほうがけ上がりも楽にできてしまいます。これまた馴染

がないのですが、つり輪の足かけ上がりというのもあります。この技も先程言ったようにドイツやドイツ語圏の人がある特定の価値を認めているものです。日本でこの技をやったら「市場さん何してるの!？」と驚かれてしまいます(笑)。これは完全に価値設定の違いですね。

尾崎：たしか1980年代中盤だったと思いますが、先程から名前が挙がっている金子先生が『体育科教育』に寄稿された論考で、現代の体操は技術のとらえ方が間違っていると主張されていました。その際、具体例として出されて、今でも印象に残っていることが、ドイツに行くとおじいちゃんが平行棒で倒立をただけで「どうだ」と言わんばかりに胸を張り、周囲の人々もその価値を認めているというものでした。このように価値の多様性を認める考えがどこから生まれるのか。今回、お話を聞いて、それはフェラインという組織が大きな働きをしているということなのではと思ったりします。

市場：私が折に触れて感じたのは、スポーツないしは器械体操的なものを通してフェラインに集まってくるのですが、みな職業がまちまちです。スイスの集団器械運動でいうと、こっちには美容師がいてこちらは銀行員のように異なった職種の人たちがフェラインによって上手くまとめられているといったらいいのでしょうか。日本のようにつま先から頭までっぺんまでスポーツしているわけではないので、その辺が良い意味で見方の多様性を育てているのではないかなと思ったりします。

尾崎：別の話題になりますが、日本の体操界は内村航平選手など多くの優れた選手が出てきて一時の不振からは抜け出したと言われてはいますが、個人的には、本当に大丈夫なのかという危惧はぬぐえません。

市場：これは今回のテーマからは外れますけど、

私はレスリングの二の舞になるんじゃないかと思
います。恩師の本間二三雄先生らが活躍した時代
は新しい技は隠し持っていました。ところが今は、
白井健三選手が技を披露しても自ら4回転である
と主張しないと審判も見抜けない状況なのです。
お客さんたちは自分の国の選手がいろいろやっ
ているを見て、16.05と15.95の差が理解出来て
いる者はたぶんいないでしょう。フィギュアスケ
ートで前向きで踏みきったらアクセルだといった
感覚ですよ。おそらくそこぐらいでわからない。
そうするとオリンピックという1回限りのものは
観に行くかもしれないけどサッカーとか野球みた
いに同じカードでもストーリーが全然違うという
風にはならないですよ。厳密にいうと同じこと
の繰り返しではないのですが、「内村選手がまた勝
ったけど、今のって4回転なんでしょ？」みたい
に、どんどん客席からは離れていってしまう。こ
のまま技が高度になればなるほどたぶん認知度理
解度は下がっていく。シルク・ド・ソレイユを観
に行くのは楽しいけれど体操競技はもういいよ
ねとなってしまうのではないかと思います。

尾崎：私個人の感覚的なところもありますが、学
校部活動から「体操部」が急激になくなっている
ことに象徴されるように、裾野の広がりを欠いて
きていること、「基盤」が弱くなってきている等々
の状況の中で、現在、メダルを一杯取っていると
いって楽観的に考えられるのかということです。

坂上：そういえば「体操部」が無くなっています
ね。

市場：私が12年前から住んでいる新潟市では、
市内の公立中学校には体操部はありません。全滅
です。ですから今日の話とリンクさせると、新
潟市でも学校外でのスポーツ活動は盛んになりつ
つありますが、その裏返しで学校のスポーツがど
んどんダメになっていく。もうひとつは学校外の
スポーツが盛んになればなるほど家族を巻き込む

割合が増えていくので、タクシーパパやタクシ
ーママ、親が送迎できるような状況が必要になっ
てくる。そういうところが上手く解消されないと、
子供のスポーツは本当に家族一丸となってやらな
ければならないものになってしまう。私が中学生
のころ、公立校どこにいても体操部があったし、
朝8時頃に登校し午後3時ぐらいに授業が終わり、
その後6時ぐらいまで部活して家に帰って夕飯食
べてというように、学校に行けばすべての用事を
済ますことが出来ていました。今は学校外に行か
なければならぬ。その為には交通機関、乗用車
が必要になります。けれども両親は残業があつた
りするわけです。このままでは日本社会はどうな
ってしまうのかと考えていたりします。

坂なつこ：前に高津先生がおっしゃっていたこと
ですが、けれどもフェラインへの参加者は年々減
ってきていて、民間のスポーツクラブに流れてい
っているといったような話もあると思うのですが。

市場：若い女性たちが流れていっているというの
は私も聞いています。

坂：さっきのホッホシュールシュポルトに女性の
参加が多いのにはチュービンゲン大学の特徴とい
うのがあると思うのですが、チュービンゲンとい
う街は大学街ですよ。なのでアクセスしやすい
ということもあるのかと思います。

市場：そうですね。日本の場合は住宅事情と交通
費の問題があります。大学の近くにアパートを借
りるよりも片道1~2時間かけて通った方が安く
済むようです。中央大学の学生でも片道2時間か
けて通っている学生がいます。それに比べてドイ
ツ・チュービンゲンだと、大学周辺に寮が何件も
ありますし、山ではありますが自転車移動が主で
す。バスにも自転車を乗せられます。下りは楽で
すから。そういう全体のインフラ整備といえます
か、チュービンゲンはいい意味でこじんまりして

います。大学自体は学生総数 3 万人強の大きな大学ではありますが。

坂：フェラインがちょっとカッコ悪いみたい。スポーツクラブに行ったほうがかっこいいよねってというような考えもあると聞いたことがあるのですが。

市場：それと大学にプログラムに女性が多いことの要因には、やはり民間のクラブに行くとなると費用がかかります。年会費とか月会費とか、大学だと無料ですから。さらにテュービンゲンの場合だと、民間のクラブ自体があまりないかもしれません。本日の私の話は 2000 年前後の情報を基に話をしているので、やっぱりそこから変わっているとは思いますが。

長谷川智：ちょうどその点についてお話を伺いたかったのですが、2000 年ぐらいから日本でもスポーツジムが、いわゆる投機対象として出てきて、お金がかなりそこに流れていって、暇なおじいちゃんおばあちゃんが通うというような形で、中高年のスポーツが行われるようになりました。もう一つは、僕も通っているのですが区立の社会教育施設や、一般の人たちがクラブを作って、先生を雇ってスペースを用意してやるというようなもの。今の日本の現状としては、商業的なものか公共施設かという 2 つの選択だと私は思っているわけです。ドイツの場合は、圧倒的な公の力で国民全体をスポーツに馴染ませようとする意志を感じるのですが、そういうところでもやはり「カッコ悪い」といったような理由等で、商業的なものに流れていってしまっているのでしょうか。

市場：流れていっていますね。私もそう聞いています。

長谷川：具体的な数字と言うか、それがどれぐらいの割合であるとかはわかりますか。

市場：具体的な数字に関してはわかりません。ただこの前の体操祭でもライナー・ブレヒトケン (Rainer Brechtken) という会長がこれだけの会員数があるにもかかわらず「もっともっと会員を取り戻そう」と語っていました。やはりドイツでも民間に人が流れているのは確かですね。会長が言うくらいなのでかなりダメージは受けていると思います。

鈴木直文：ドイツでは民間に人が流れていて、日本では公共の施設が少ないので、同じようなことが実現することは夢のまた夢なんだと思いますが、抽象的な言葉になってしまっていますが、いい方向に進んでほしいという感触は持っていますしそこは共有できることだと思います。だとしたときに、日本で実現できる可能性がある部分、ドイツのフェラインが持っている価値の中で何を守って実現しようとするのが現実的かつ効果的なのかということをお聞かせいただいてもいいでしょうか。スポーツをする/運動をするということであれば、民間でもどこでも人が増えることが喜ばしいことだと思います。でもそれだけではよくないと感じていて、先程お話しされていたように仕事終わってから、運動に行って余裕を持ってビール一杯ぐらい飲んでというようなインタラクションが起きることも理想ではあるなと思います。そんなことをしつつ思ってしまうのですが(笑)。

市場：逃げるような言い方になってしまいますが(笑)、たぶんドイツのフェラインのコピーを日本に作ることは出来ませんよね。日本流にアレンジされたものにならざるを得ないというぐらいしかアイデアがありません。ある意味東京近郊では駅近 24 時間営業のような所があると思います。あれが商業的ではなくて、例えば区や市といった自治体とタイアップが出来たりするというのはないかなと、商業ベースだけではなくて、どこまで本当かはわかりませんが皇居を走っているような人たちは、銭湯に行って荷物を置いて着替えて

といった形ができています。当然お金はかかると思いますが、そういうのが手軽にできるようなればと、スポーツショップと提携をしているらしいのですが、それが勤め先と地域と連携が出来たら少しは変わるのではないかと感じたりします。ただ具体的にどうするかと問われると、厳しいところがあります。日本だと大都市になればなるほど駅付近だと遅くまで営業していますが、その一方で文部省からは総合型地域スポーツクラブを言われて、全然地域になっていないじゃないかと、その矛盾はどう考えているのか聞いてみたいものです。

坂：大学の施設を利用するというのはどうですか。

市場：いいと思います。一橋大学なんかは近所の保育園や幼稚園ぐらいのお子さんの遊び場になっていると聞きます(笑)。いいことかは別として、有効利用は確実にできているのではないかと思います。

張寿山：やはりドイツと日本ではインフラの充実度が違うなど感じています。そこには歴史の違いもあったりすると思いますが、29 ページなんですけどゴールデンプランで連邦政府と州と自治体がお金を出し合っているんな施設を充実させたということですが、そうなるとできたインフラというのは誰の所有物になっているのかというのが一つ目の質問です。別の本で読んだときにはフェラインでも自らの施設を持っているところもあると、名義はどうなっているのかと。所有権を持っている方はきっと維持や改善の費用も必要になるでしょうし、あるいは固定資産税的には優遇されるのかといった制度的な面から見てインフラを誰が維持して主体的に管理しているのかというのを教えていただきたいなと思います。

市場：私の一番弱いところですね(笑)。チュービンゲンの例で言いますとシュポルトフェラインの

活動の一環としてチュービンゲン大学のスポーツ施設を使っていました。チュービンゲン大学にはスポーツ科学の専攻課程があるので大学が管理をしていると思います。そこではない場合、クラブが体育館というか総合的なスポーツホールを持っている場合もありますが、そこは恐らくクラブが保有しているものだと思います。ただ学校も使う、クラブも使うといった施設の管理体制はわからないというのが正直なところですよ。

張：ドイツのように連邦政府、州、自治体がそれぞれお金を出したら、じゃあこの後は誰が面倒をみるのという話になると思うんですよ。

市場：その通りですね。ただドイツの場合はどうでしょう。自治体が多いと思うのですが。

張：自治体に寄付というか、移譲をしたということでしょうか。

尾崎：自治体が公的に所有し、主管部局が年間予算を立てて運営するということが多々あると思います。それに対して、個々のフェラインが所有している場合も、日本と比べればはるかに多いと思います。その場合、フェラインの会費のほかに、会員以外の人へ貸し出して料金を徴収する等での独立採算という性格があるでしょうが、同時に、フェラインの施設を地域など、社会に広く開かれていることに対して公的な補助金が入りてくることもあります。ひとつのところから大きな金額をとというよりも、いろいろなところから少しずつつまかなって維持していく。これがドイツのスタイルではないかと私は認識しています。

張：この前、サザエさんの銅像だったと思いますが大した額ではなかったと思いますが固定資産税の問題が出たと思います。あれぐらいで大問題になってしまうようですから日本だったらどうしたらいいのかというのは気になる場所です。

坂：ドイツは州ごとの力が強いというのはあると思います。あと自治体に関しても日本と比較すると強いと思います。

市場：ちなみに文部省の HP にドイツのスポーツ政策の基本制度というものがあります。これはよく調べてあるなという印象です。

中澤：日独比較なんですけれども、ドイツを見本にして日本が何を学べるかということで議論がされていたと思うのですが、少し別の視点でお聞きしたいと思います。私から見るとドイツがすごく特殊に見えます。なんでこんなにスポーツが好きなんだろうかという疑問がすぐに湧いてきます。しかもそこに相当な公的な資金が投入されていることが異常にも見えてしまう。例えば 80 歳の女性の方がとても楽しくスポーツをやっている、そのことがドイツ的な価値観から見ると素晴らしく映るけれども、とても日本の同年代の女性はああいうことはしないですよ。しないんですが、話を聞いてみるとそこにはまた深い思いがあるというのも事実だと思います。だとするとやはり、ドイツはなぜこんなにスポーツが好きなのかと、ゴールドプランについてもなぜこれほどまでにお金を出したのかと。その価値観についてもう少し踏み込むと、どういう答えが見えてくるのでしょうか。ひとつ論点を出すと、法的にはスポーツの権利は社会権として定義されているのでしょうか。国家が応えるべき内容に入っているのでしょうか。

市場：たぶん日本のスポーツ振興法のモデルとなるような基本計画の中で書かれているとは思いますが。

中澤：とても行政レベルの問題だけではなくて、法レベルでの議論なり到達点があったんだろうなというのが予測されるのですが、その時にどういう合意があったのかと。社会集団のスポーツへの価値づけとその合意がどうあったのかと。

坂上：それこそがフェラインなのではないでしょうか？ 100 年以上前から村に存在していて村の人たちがそこに集ってやっているということからすると。

中澤：そうなる私の問いはなぜフェラインが生まれたのかということに還元されていくのですが、それとも戦後に限れば歴史的背景とは別にターニングポイントなりなんなりがあったのでしょうか？

金子史弥：今の話に関連があると思うので一つよろしいでしょうか。スポーツフェラインの成り立ちの部分で、日本ではドイツやイギリスのスポーツクラブについて言及するときに地域色が強いということが代表的に語られる部分があると思います。ドイツの総合型地域スポーツクラブですとレヴァークーゼンの例を佐伯先生あたりが紹介して、それが玉木（正之）さんに伝わってレヴァークーゼンが一つのモデルとして紹介されるようになったと思うのですが、レヴァークーゼンのスポーツクラブというのはバイエル（Bayer）社が企業の福利厚生施設としてしっかりしたものを作って、それがどうも地域に開放されていったというような流れがあるかと思います。つまり元々は企業のスポーツクラブというものもあるのかなと。そうした時にスポーツフェラインがどの程度、地域の人たちが単純に集まってできたもので、どの程度が企業が福利厚生の施設として作ったものが地域に開放されていったものなのかという歴史的な部分あまり紹介されていないと思います。その辺りは、市場先生が見られたフェラインがどのように成立しているのかというのはみえるものなのでしょうか。

岡本：続けてよろしいでしょうか。体操はトゥルネンとして圧倒的に広まったのですか。

市場：そうですね。1840 年代辺りから広まりました。

た。

岡本：そこにスポーツが入ってきて、広まったり広まらなかったりに影響したということはなかったのでしょうか。

市場：少しレヴァークーゼンの話からはずれてしまいましたが、スポーツクラブではサッカーが中核となっているところは多いですが、歴史的にはゲルマン人はイギリス人のサッカーを嫌っていて、入ってきたら一気に広まってしまったというのがあります。

岡本：その辺に関して高津勝先生（本学名誉教授）が『現代ドイツスポーツ史序説』の中でトゥルネンフェラインとスポーツフェラインの最初の葛藤の様子を書いているのですが、私の解釈ではそこには競技特性の違いによる影響があったのではないかと思います。サッカーの場合には対戦相手が常に必要で、常に相手がいて相手を認めるということがある一方で、体操の場合は内向きで他人と競うことも重要だけど、自分の技を磨くことであるとか、磨いた技を周りの人の前で披露するといった競技特性といいますか種目特性がある。そういうものがフェラインの普及に影響したということは考えられるのでしょうか。

笹生心太：中澤先生と同じ質問が思いついたのですが、少し質問の仕方を変えたいと思います。ドイツの方々にとってレジャーとしてのスポーツとはだいたい何位ぐらいに位置づくものなのか、例えば日本人でいえば我々スポーツ関係者以外の方は余暇に何をしているといえパチンコや音楽鑑賞やそういったものがスポーツよりも上において、実感的にはスポーツは7位8位ぐらいだと思います。ではドイツの方々には、スポーツ以外の他の余暇活動も盛んにやっているのかどうかということ、中澤先生がおっしゃったようにスポーツが群を抜いて人気があるのか。いかがでしょうか。

市場：私の狭いドイツの人間関係からしますと、トップはスポーツになると思います。ミヒャエル・クリューガーもチェロを弾いたりしますが、彼は暇があったら自転車乗っているか走っているかでしたので。

笹生：街中には映画館が日本ほど無いとか、他の余暇施設というのは目立たないのでしょうか。

市場：映画館はいっぱいありますね。ただドイツにはパチンコはありません(笑)。なぜかわかりませんが、ドイツ人は散歩が大好きです。冬でも乳母車にダウンや毛布をかけて寒くないようにして親たちもしっかりと防寒してウインドショッピングをしたりします。わざわざ車に乗って郊外の公園に行って2時間ぐらい歩き回って帰ることもあります。

長谷川：ドイツ的身体運動を通じて愛国的青少年を育成する、という文言と日本でいう武道を使ってどうこうするというものとある種の親和性を感じますが、私自身興味があるのはドイツ的な身体運動ということです。先程の平行棒への登り方であるとか、そういったものはなにか制定されているものがあるのか、ないとしたら先生が感じておられている基本概念のようなもの、ドイツを特徴づける運動についてお伺いできればと思います。

市場：7年間ドイツにいたので、多少ドイツが染みついてる部分もあるかもしれませんが、他のところをそのような見方で見たことが無いので、ちょっとわからないですね。体操の話でいうと、ドイツの特徴というのはわかるのですが、ヨーロッパの中でドイツの特徴と言われるとなかなか難しいものがあります。ただ一つ、これがドイツの例だったかどうかは不確かなので参考としていいかはわかりませんが、国際的な体操競技が成立していくときに、つり輪が問題でした。たしかラテン系の国はブランコのように振っていました。他

の国は現在のようなやり方でした。ある時の世界選手権大会でつり輪論争が起き、10年ぐらいつり輪が国際舞台で行われなくなる時期があります。こんな話があるので明らかに様式の違う事例というのはあったのでしょうか。

長谷川：金子先生などの体操論を見ていたりすると、蹴上がり方の懸垂とそのまま上がろうとするものと二種類あって、技とそもそもの鍛える場所の違いもあるというような気がします。例えば乗馬だったらフランス的な乗馬は流動的で、ドイツ的な乗馬はピシッと背骨をまっすぐにしてやるといったような。楽器演奏だったらフランス流であつたら滑らかに弾くけど、ドイツだったらピシッと背骨を立ててみたい、なんかそういうドイツにはピシッとしているイメージがあります。それから筋にグッと力を入れて下手な技は使わないというような。

市場：今の金子先生の話でいきますと、どちらかという鍛える方が主眼だったと思います。鉄棒で振るときも半懸垂と言って肩に力が入ったまま振るなさいと。しかし、これではダイナミックには振れません。今はほとんど力を抜いてやりますが、脱力をよしとしないような、力が入ったままがよいんだという教え方をしているところもまだあります。それはよくないだろうと思います。

長谷川：ドイツでは日ごろから体を鍛えなきゃという発想があつたりするのでしょうか。

市場：あん馬の取手が平行棒になってしまったように、やはり主眼としては精神的には違うかもしれませんが、肉体的にはダイナミックに動くというよりは、懸垂やれば腕が強くなるという発想の方が強かったのかもしれない。

張：もう一つお聞かせ願えますか。今日はドイツの特殊性のような話が出たと思うのですが、ヨー

ロッパの中でもドイツは特殊なのでしょうか。クラブ文化というのは他の国にもありますし、例えばスペインとかオランダではドイツに近いようなクラブ文化があるように思えるのですが、なにかドイツとここが違うというのがあるのか、もしくはヨーロッパとして同じようなアイデアがあつて、ドイツが進んでいるという見方をした方がいいのでしょうか。

市場：進んでいるというかととても色濃いですね。太文字でドカッとやっている様なイメージを持っています。

張：はっきりと違いますか？

市場：水と油ほど違うわけではないと思いますが、陸続きなので互いに影響し合っていたと思います。トリムという北ヨーロッパ起源言葉がドイツ語になってしまったり、トゥルネン以外にもスウェーデンやデンマークの体操が知られているように、お互い関係しながら形成されていったと考えています。

張：つまりドイツは進んでいるが、これはある程度ヨーロッパで共通の制度・思想なんだという理解をしたほうが良いということでしょうか。

市場：あえてどちらかといえば、汎ヨーロッパ的なところはあるのかなと思います。少なくともドイツ、スイス、オーストリアのドイツ語圏は同じようなシステムのフェラインを持っていますから、そこから染み出ていくあるいは影響を受けることを考えたら、総合型地域スポーツクラブというのはヨーロッパ型なのかもしれません。他の国の事情をあまり知らないのうかつなことは言えませんが。

坂上：スポーツ施設の整備に関してはどうですか。

市場：それに関しては、ドイツ人は凄まじいですね。突出していると思います。先程も言いましたが、場所が無いから三角ベースにしようという発想はドイツ人にはありません。手弁当ではダメでちゃんとした枠組みを作らないと気が済まないようで、例えばサッカーをやりたいとけれど空地しかない、そうするとサッカー場を作ろうということになるわけです。日本人は包丁1本で玉ねぎのみじん切りから刺身まで作り上げる器用さを持ち合わせていますが、ドイツ人はみじん切り用、パン用、チーズ用といった具合に、用途別に包丁を作り分ける器用さを持っています。1本の包丁を多様に使うことは出来ない、この辺りがひょっとするとスポーツ施設の整備に対する姿勢と共通していて、きっちりとしかるべきものを作らないと、と考えるのではないかと思います。

坂上：実際の達成度はどうですか。1920年代段階でも一人一坪とか目標値が設定されていましたが、達成度を数値化したものは、今あるのでしょうか。

市場：調べたら出てくると思いますが、ちょっといまは分かりません。ただ1960年から75年、75年から90年ぐらい、2000年からまたゴールドンプランが始まっているということは、既存の施設の改修や増改築や建て替えといった時代に入っているのかもしれませんが。施設の新たな設置ではなくて、ゴールドンプランで建てた建物などの点検の時期に入っているのかなと、ゴールドンプランはそういう内容なのかなと考えています。

尾崎：スポーツフェラインの地位が相対的に下がっているのは事実ではあるけれど、施設があるということが呼び水となり新たな人々の活動が誘発されて起こってくる。そのため、いったん施設の建設目標は達成したものの、これで十分足りているということにはならないという議論があるようです。

坂上：まだ足りない？

市場：体操や器械運動なども今日何度も話題にしたあん馬や平行棒よりも、ここ10年15年ぐらいでしょうか、「ヤマカシ」という映画が出て話題となったパルクール、家から家に飛び移るとか、このようなところに器械運動がシフトしていつていることもあります。従来の古典的な鉄棒や平行棒ではなくて、スケートボード用のU字パイプ施設を作るなど、新たなものの設置が始まっているのかもしれない。いま尾崎さんが言ったようにパーフェクトはどこにもなくて、ここまでできたから次は何々となっているのかもしれない。

坂：そういう意味では参加者というかドイツの中でも地域差も当然あると思いますが、移民との関係などフェラインへの影響などはありますか。アイルランドでは、クラブをコミュニティ形成の場にしようとしていて、先程のドイツ的身体の話でいうと、反対に誰でも入れるようにオープンにしてここから新たなコミュニティを形成しようとする。参加者を増やそうとしているのですが、フェラインはどうでしょうか。

市場：ドイツにおいてもその傾向はあると思います。はっきりとした根拠はありませんが、確かに昔からトルコ人は多かったですし、この頃はもっと東からくる人も増えていますし、スポーツの中での移民対策というのも考えなければならぬとも言われています。

張：読んだ資料の中にはフェラインの参加者の中で15%ぐらいが移民であるというデータがありました。（注 ヨーロッパ諸国のスポーツクラブ 川西正志監訳 市村出版 2010）

坂：去年のドイツ体操祭の映像を撮影していてそのような印象は受けましたか？

市場：そういう印象は逆になかったですね。「ダ
スインターナツィオナーレドイツツェトゥルン
フェスト (das Internationale Deutsche
Turnfest)」と言ってインターナショナルがついて
いるのですが、過去にドイツからの移民が多かっ
た南米系の人やイスラエル系の人もいました。移
民というか移住者という外見はあまり目にしな
かったですね。これからはどうなるかわかりませ
んが。

岡本：それは社会階層とは関係があるのしょう
か？

市場：そこはあまりないと思います。フェライン
の場合は年会費も日本の商業的クラブに比べれば
格段に安いはずですし、いろいろ割引のようなも
のもバリエーションが豊かなのでフェラインに来
ているのであればたぶんこういうところにも来
ると思います。

坂上：すみません。だいぶ時間を過ぎてしまいま
したのでここで締めさせていただきたいと思いま
す。市場先生ありがとうございました。